

令和8年9月2日
農推第1353-5号

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

目次	ページ
特に発生に注意(9月)【なす:アザミウマ類、野菜類・花き類:コナジラミ類、ハダニ類、果樹類:果樹カメムシ類】	1~3
病害虫の発生予報(9月)	4
水稲	5
野菜【なす、きゅうり、野菜類・花き類】	5~9
果樹【ぶどう、みかん、果樹類】	9~11
花き【きく】	12
その他注意すべき病害虫【スクミリンゴガイ、トマトキバガ、クビアカツヤカミキリ】	12

特に発生に注意(9月)

なす:アザミウマ類

ミナミキイロ
アザミウマの
被害果実

ミナミキイロアザミウマ成虫※

ミカンキイロ
アザミウマの
被害果実

特徴

- ◆ ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが果実や葉を加害する。
- ◆ ミカンキイロアザミウマの果実被害は、水なすで目立つ。
- ◆ ヒラズハナアザミウマは水なすの果実を加害する。

防除のポイント

- ◆ 葉の被害に注意し、少発生時の防除を徹底する。
- ◆ 開口部を0.8mm目合いの赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場および周辺の除草を徹底する。
- ◆ 発生を認めたら、モベントフロアブル、アファーム乳剤、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

次回の情報は9月下旬にお知らせします。

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

特に発生に注意(8月)②

野菜・花き類:コナジラミ類



コナジラミ類が
発生した葉*



タバココナジラミ
成虫※



キュウリ退緑黄化病
発症株※



トマト黄化葉巻病
発症株

特徴

- ◆ 現在、府内のなすやきゅうり、トマトなどで発生が見られるのは、ほとんどがタバココナジラミである。
- ◆ 葉の汁を吸ってネバネバした液を排泄し、その上にすす病が発生するため、葉や果実が黒く汚れる。
- ◆ 多発すると株全体が弱り、収量が減少する。
- ◆ タバココナジラミはウイルス(CCYV※1、TYLCV※2、ToCV※3)を伝搬する。

※1 キュウリ退緑黄化病の病原ウイルス

※2 トマト黄化葉巻病の病原ウイルス

※3 トマト黄化病の病原ウイルス

防除のポイント

- ◆ 施設開口部に目合い0.4mmのネットを展張し、成虫の侵入を阻止する。
- ◆ 施設周辺及び内部の除草を徹底する。
- ◆ ウイルス病の感染株は、施設外へ持ち出し処分する。
- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するタバココナジラミの防除を徹底する。
- ◆ ベストガード水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、きゅうりなど)、アグリメック(なす、トマト、きゅうりなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

ハダニ類



なすの被害葉

特徴

- ◆ 主にカンザワハダニとナミハダニが加害する。
- ◆ 葉で吸汁された部分が点状に白く抜ける。
- ◆ 高温乾燥を好む。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、ダニオーテフロブル(なす、いちご、きゅうり、花き類・観葉植物など)、スターマイトフロアブル(なす、いちご、きゅうり、きくなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

6月～8月は農薬危害防止運動月間です。農薬は適正に使用し、事故・被害を防止しましょう！

特に発生に注意(8月)③**果樹類:果樹カメムシ類**

チャバネアオカメムシ

特徴

- ◆ チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシなどが加害する。
- ◆ 園地により飛来量が大きく異なる可能性があるので、園内を見まわり発生及び被害状況を確認する。

防除のポイント

- ◆ 園全体を目合い4mmのネットで覆い、侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、スタークル／アルバリン顆粒水溶剤(かんきつ、ぶどう、かきなど)、アディオン乳剤(かんきつ、かきなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤散布は夕方か早朝に行うと効果的である。
- ◆ スギ林やヒノキ林の隣接ほ場では、被害が多くなる傾向があることから特に飛来状況に留意する。

令和8年5月22日発出の病害虫発生予察注意報第1号「果樹カメムシ類」についてもご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/129571/2605_r8cyuihou01_kajyukame.pdf

6月～8月は農薬危害防止運動月間です。農薬は適正に使用し、事故・被害を防止しましょう！

病害虫の発生予報(9月)

作物名	病害虫名	予想発生量(9月)
水稻	紋枯病	少ない
	トビイロウンカ	やや少ない～平年並
	斑点米カメムシ類	やや多い
なす	うどんこ病	少ない～やや少ない
	アザミウマ類	多い
きゅうり	べと病	やや少ない～平年並
	うどんこ病	やや少ない～平年並
	褐斑病	やや少ない～平年並
	ミナミキイロアザミウマ(黄化えそ病)	やや多い
	コナジラミ類(退緑黄化病)	多い
野菜類・花き類	シロイチモジヨトウ	やや多い～多い
	ハスモンヨトウ	やや多い
	オオタバコガ	平年並～やや多い
	コナガ	平年並
	コナジラミ類	多い
	アブラムシ類	平年並
	ハダニ類	多い
ぶどう	べと病	少ない～やや少ない
	褐斑病	やや少ない
	チャノキイロアザミウマ	やや多い～多い
	フタテンヒメヨコバイ	やや多い
	ハダニ類	平年並～やや多い
みかん	黒点病	やや少ない
	ミカンハダニ	平年並
	ミカンサビダニ	やや多い
	カイガラムシ類	やや多い
果樹類	果樹カメムシ類	多い
きく	黒斑病・褐斑病	少ない
	アザミウマ類	やや多い～多い

※予想発生量は、平年値(概ね過去10年の平均)に比べて、「多い・やや多い・並・やや少ない・少ない」の5段階で示しています。

※予報の根拠は下記ホームページ内の「病害虫発生予察情報」の該当月をご確認ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/index.html>

水稻

斑点米カメムシ類



アカスジカスミカメ

アカヒゲホソミドリカスミカメ
(イネホソミドリカスミカメ)

ホソハリカメムシ

イネカメムシに要注意！！



イネカメムシ

基部斑点米や不稔米被害を起こす。水田飛び込み時期が他のカメムシより少し早めで、開花直後から穂の吸汁加害を始めるので出穂期の防除が必要となる。

特徴

- ◆ アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ(別名イネホソミドリカスミカメ)、ホソハリカメムシなどの発生が多い。
- ◆ イネが出穂すると畦畔や周辺のイネ科雑草から水田に飛来してくる。

防除のポイント

- ◆ 出穂10日前までにほ場周辺の畦畔や休耕田の除草を実施する。
- ◆ 水田内のノビエやイヌホタルイは、斑点米カメムシ類の増殖源となることから、除草する。
- ◆ 出穂期～穂揃期にスタークル/アルバリン粒剤(カメムシ類)、トレボン乳剤(カメムシ類)等を根元まで届くように散布する。発生が多い時は乳熟初期(出穂後10日頃)にも散布する。

「水稻・斑点米カメムシの防除」(令和6年7月改訂版)もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/hantenmaikame_osaka.pdf

野菜

なす

うどんこ病



被害葉

特徴

- ◆ チッソ過多で気温が25～28℃、湿度が50～80%で日照不足が続くと発生する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期に、ベルコート水和剤、フルピカフロアブル等を、発生を認めたら、パンチョTF顆粒水和剤、パルミノ等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

きゅうり

べと病



被害葉＊

特徴

- ◆ 気温20～24℃で発生が多い。
- ◆ 下位葉に葉脈で囲まれた黄色角形の病斑ができ、上位葉へ拡大する。

防除のポイント

- ◆ 排水を良好にし、過湿を避ける。
- ◆ 施設栽培では換気に注意し、結露を避ける。
- ◆ 被害茎葉を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 肥料切れしないように、肥培管理に注意する。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ジマンダイセン水和剤／ペンコゼブ水和剤、プロポーズ顆粒水和剤等を、発生を認めたら、アミスター20フロアブル、バトファイター顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

うどんこ病



被害葉＊

特徴

- ◆ 施設栽培で、日照不足、乾燥時に発生が多い。
- ◆ 昼夜の温度差が大きくなると発生が多い。
- ◆ はじめ株の下位葉に小麦粉をかけたような病斑ができる。しだいに上の葉に広がり、葉面全体が白色の粉を振りかけたようになる。

防除のポイント

- ◆ 施設内の換気を良好にする。
- ◆ 被害葉を除去し、通風を良くする。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ベルコート水和剤、フルピカフロアブル等を、発生を認めたら、トリフミン水和剤、ケンジャフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

褐斑病



被害葉

特徴

- ◆ 高温、多湿の施設栽培で発生が多い。
- ◆ 天井フィルムからの結露水のボタ落ちで発病が助長される。
- ◆ はじめ葉に円形・褐色の小型病斑を生じ、やがて灰褐色の5～10mm程度の不規則な病斑になる。多湿条件では病斑上に黒褐色のカビが生える。

防除のポイント

- ◆ 施設内の換気を良好にし、多湿にならないよう注意する。
- ◆ 被害葉・老化葉は早めに除去する。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ジマンダイセン水和剤／ペンコゼブ水和剤、プロポーズ顆粒水和剤等を、発生を認めたら、パレード20フロアブル、カンタスドライフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

ミナミキイロアザミウマ(黄化えそ病)



ミナミキイロアザミウマ被害葉※



黄化えそ病被害葉※

特徴

- ◆ アザミウマの発生初期は、葉の葉脈沿いにカスリ状の白い斑点を生じる。
- ◆ ミナミキイロアザミウマがMYSV(メロン黄化えそウイルス)を伝搬し、キュウリ黄化えそ病が発生する。
- ◆ MYSVに感染すると、葉にえそ斑点を伴うモザイク症状や黄化等の症状を示す。

防除のポイント

- ◆ 施設の開口部を0.8mm目合いの赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ ミナミキイロアザミウマの発生を認めたら、グレーシア乳剤、アファーム乳剤等を散布する。
- ◆ 黄化えそ病の発病株はほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

野菜類・花き類

シロイチモジヨトウ



老齢幼虫



卵塊とふ化幼虫

特徴

- ◆ ねぎでの発生が多いが、しゅんぎく、まめ類、なす科野菜、あぶらな科野菜、花き類等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ ねぎでは葉身内に食入し、薬剤が届きにくくなるので、卵塊の除去及び集団でいる発生初期(若齢幼虫期)に防除を行う。
- ◆ 発生を認めたら、ディアナSC(ねぎなど)、コテツフロアブル(ねぎ、キャベツ、さく)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

病害虫発生予察注意報第3号「シロイチモジヨトウ」
(令和8年6月30日発出)もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/129571/2606_r8cyuihou03_siroichimojiyoto.pdf

ハスモンヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ なす科野菜、あぶらな科野菜、さといも等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生初期(若齢幼虫期)に防除を行う。また、卵塊や集団でいる幼虫の除去に努める。
- ◆ 発生を認めたら、アニキ乳剤(キャベツ、非結球あぶらな科葉菜類など)、トレボン乳剤(さといも、さといも(葉柄)など)、プレオフロアブル(さといも、キャベツ、なすなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

「ヨトウムシ類の見分け方と防除」(平成13年3月作成)もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/yotoumushirui_osaka.pdf

オオタバコガ



幼虫



卵

特徴

- ◆ 果実や茎などに食入する。食害痕のまわりに虫のフンが確認されることが多い。

防除のポイント

- ◆ 幼虫の捕殺は、被害軽減効果大きい。また、摘除した茎葉や果実に、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場外へ持ち出し、処分する。
- ◆ 果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果が落ちるため、早めに対応を行う。
- ◆ 発生を認めたら、アニキ乳剤(なすなど)、プレバソンフロアブル5(なす、トマト、ミニトマトなど)等を散布する。

病害虫発生予察注意報第2号「オオタバコガ」(令和8年6月30日発出)もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/129571/2606_r8cyuihou02_otabakoga.pdf

コナガ



幼虫 ※



成虫 ※

特徴

- ◆ 主にあぶらな科野菜を加害し、葉を薄皮だけ残して食害する。
- ◆ 一部地域でジアミド系殺虫剤に対する抵抗性が生じている。

防除のポイント

- ◆ 発生初期に防除を行う。
- ◆ 発生を認めたら、グレーシア乳剤(結球あぶらな科葉菜類、非結球あぶらな科葉菜類など)、アフーム乳剤(キャベツ、こまつななど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

アブラムシ類



ワタアブラムシ※

特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排せつ物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、スタークル／アルバリン顆粒水溶剤(なす、ピーマンなど)、コルト顆粒水和剤(トマト、ミニトマト、ピーマンなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

果樹

ぶどう

※注意！

一部の農薬は、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、幼果期から果粒肥大期の散布を避けて袋かけ以降に使用し、無袋栽培(傘掛けを含む)には使用しない、等の注意事項が掲載されていますので、よく確認してください。

べと病



葉裏の症状

特徴

- ◆ 雨が続くとまん延しやすい。

防除のポイント

- ◆ 被害葉は速やかに取り除く。
- ◆ 発生を認めたら、レーバスフロアブル、ホライズンドライフフロアブル等を散布する。
- ◆ 農薬を散布する際に、薬害や果実の汚れを避けるため、傘・袋かけ後は棚上散布を行う。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

褐斑病



被害葉

被害葉(拡大)*

特徴

- ◆ 米国系品種に弱い品種が多く、デラウェア、マスカットベリーAなどに発生が多い。
- ◆ 多発すると、葉が早期落葉し、果実の着色が不良となる。

防除のポイント

- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 発生を認めたら、オンリーワンフロアブル、ホライズンドライフフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

チャノキイロアザミウマ



被害果＊

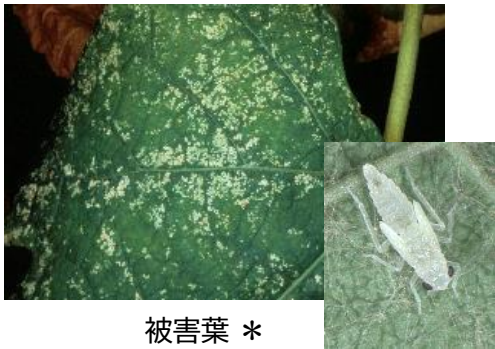
特徴

- ◆ 巨峰、シャインマスカット等の大粒系品種で被害が大きくなりやすい。

防除のポイント

- ◆ モスピラン顆粒水溶剤(アザミウマ類)、コルト顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

フタテンヒメヨコバイ



被害葉＊

幼虫

特徴

- ◆ 葉の裏側から吸汁する。被害部分は色が白く抜ける。

防除のポイント

- ◆ 園周辺の草むらや落葉下で多く越冬するので、周囲の除草や清掃に努める。
- ◆ 発生に注意し、被害の初期に防除する。
- ◆ 発生を認めたら、モスピラン顆粒水溶剤、エクシレルSE等を散布する。

みかん

ミカンハダニ



被害葉

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなる。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、スターマイトプラスフロアブル(かんきつ)、マイトコーネフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 薬剤を散布する場合は、葉裏にも薬液がかかるように散布する。

ミカンサビダニ



被害果

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなりやすい。

防除のポイント

- ◆ 発生の初期に、ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤等を散布する。
- ◆ ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤に対して薬剤抵抗性が生じている地域では、コテツフロアブル(かんきつ)、ダニエモンフロアブル(かんきつ)等を散布する。

- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

※注意！

ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤は、かんきつ(みかんを除く)における使用時期が「収穫90日前まで」なので注意する。また、皮膚のかぶれに注意する。

カイガラムシ類



ナシマルカイガラムシの被害果

特徴

- ◆ ナシマルカイガラムシ(サンホーゼカイガラムシ)等が加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生の多い園地では、防除を徹底する。
- ◆ 幼虫発生期にモスピラン顆粒水溶剤(かんきつ)、トランスフォームフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

幼虫発生期

ナシマルカイガラムシ: 5月下旬～6月中旬、8月上旬～中旬
ヤノネカイガラムシ: 5月下旬～6月下旬、8月中旬～9月上旬

花き

きく

アザミウマ類



ミカンキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 品種により被害の現れ方に差がある。
- ◆ 花弁はミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマなどが加害し、葉は主にクロゲハナアザミウマなどが加害する。
- ◆ ミカンキイロアザミウマはウイルス(TSWV※1、CSNV※2)を媒介する。
※1 キクえそ病の病原ウイルス ※2 キク茎えそ病の病原ウイルス

防除のポイント

- ◆ ほ場内および周辺の除草を行う。
- ◆ きくの残さは放置せず、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ ビニールなどのマルチングにより、土中での蛹化を防ぐ。
- ◆ 施設では、開口部に0.8mm目合いの防虫ネットを展張し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 葉の被害に注意し、小発生時の防除を徹底する。
- ◆ 発生を認めたら、ディアナSC(花き類・観葉植物(除りんどう))、アファーム乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

その他 注意すべき病害虫

果樹：バラ科果樹(もも、すもも、うめ等のサクラ属)

クビアカツヤカミキリ



フラス



幼虫

成虫

特徴

- ◆ 成虫は体長2～4cm。前胸部は明赤色で、全体は光沢ある黒色。成虫は6～8月頃に羽化する。
- ◆ 幼虫は樹体内を食害し、4月～10月頃にフラス(幼虫の糞・木くず・樹脂の混合物で、中華麺～うどん状の太さに固まる)を排出する。

防除のポイント

- ◆ フラスの発生を見逃さないように、ほ場をよく見回る。
- ◆ フラスが見られたら、千枚通しや針金等でフラスをかき出してからロビンフッド(もも、すもも、うめなど)を注入するか、幼虫を突き刺して殺虫する。

「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策
(R8.5改訂版)」もご参照ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/kubiaka2605.pdf>

